

# ささいな恐怖

電話／影／あごひも



GIMA

ふといたずら心で、電話を取った。

自分の家から自分の家へかけようというのだ。

\*\*\*\*-\*\*\*\*.....

ツー、ツー、ツー。話し中だ。

こうなるのが当然だった。照れ笑いを浮かべて受話器を下ろそうとしたとき、ガチャッと受話器が上げられる音がして、

「もしもし？」

声が出た。ギョッとして、あわてて受話器を下ろした。

きっと、間違っかけてたのだ。

そのとき、電話のベルが鳴った。

恐る恐る受話器を取って、

「もしもし？」

そう言うと、何も言わずに切れた。

夜、自分の「影」を見ると、近いうちに命を落とす……

深夜の街、暗い街で、自分と同じ姿を見たとき、その話を思い出した。

全く同じだ。背筋が凍った。

だが、じっと見ているうちに気がついた。

こっちが右手を振れば、向こうは左手を振る。笑えば、笑う。

わかった。ショウ・ウインドウに自分が映っていたのだ。ばかばかしい。

アハハハハと笑って、それを確認すべくショウ・ウインドウに近づいたとき、

足元の、ふたの開いた深いマンホールに落ちた。

ショウ・ウインドウには、まだ影が映っている……

知り合いの女子高校生がいる。

通学のときもそれ以外の日常でも、いつもミニバイクで走り回っている。

ヘルメットは頭の上半分をカバーする、いわゆるドカヘルタイプを愛用しているが、髪型が崩れるのを嫌がってか、あごひもを長く伸ばし、うなじのあたりにぶら下げている。

いつも注意するのだが、聞く耳を持たない。

「お前なー、ちゃんとかぶらんと、こけたときに何かに引っかかって、首がしまっちゃうぞ」

「そんなこと、ならへんもん」

確かに、そんなことにはならなかった。

先日、渋滞する車を避けてセンターラインすれすれを走っていたとき、対向車線を走るワンボックス車とすれ違った。

ヘルメットがワンボックス車のミラーに引っかかり、一瞬で首が切断された。

首を失った彼女が乗ったまま、ミニバイクは10メートルほど走行し、その後転倒した。